様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３１３０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０６４１

研究課題名（和文）ＣＬＩＬと文法指導の融合による英語運用能力の伸長

研究課題名（英文）The Effects of CLIL and Focus on Form on EFL Learners' Second Language Development

研究代表者
村野井　仁（Muranoi, Hitoshi）

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：２０２７５５９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：効果的な第二言語指導形態として注目を集めているCLIL(content and language integrated learning/内容言語統合学習）を日本の英語学習環境で実践し、CLIL活動が日本人英語学習者の文法・語彙習得及び英語学習動機にどのような影響を与えるか検証した。
本研究ではCLIL活動として次の２つの活動を行った：１．東日本大震災が引き起こした原発事故の影響を受けた福島の若者の声を海外に発信する活動、２．韓国の大学生とスカイプを用いて異文化間交流を行う活動。量的及び質的分析の結果、これらの活動が英語学習動機および文法・語彙習得に正の効果をもたらすことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study examined the effects of CLIL (content and language integrated learning) on Japanese EFL learners' second language development. The CLIL activities conducted in this study were (1) the publication of messages from young people who were affected by the Fukushima Nuclear Power Plant accident, and (2) cross-cultural communication between Korean and Japanese EFL learners via Skype. The effects of these CLIL activities on the development of intrinsic motivation for learning English and lexical and grammatical development were investigated quantitatively and qualitatively using questionnaires and pre- and post-tests. Results of these analyses revealed that these CILI activities had significant positive effects on enhancing EFL learners' intrinsic motivation, especially in formulating an ideal L2 self. Furthermore, these activities were found to be effective in developing EFL learners' grammatical and lexical abilities.

研究分野：第二言語習得研究

キーワード：内容言語統合学習　内発的動機　理想的第二言語自我　異文化間交流　文法習得

１．研究開始当初の背景

本研究では CLIL(Content and Language Integrated Learning/内容言語統合学習)が第二言語習得に与える影響を調査した。

CLIL とは第二言語学習と内容のある事柄についての本物の学びを統合して、総合的な学習を促そうとする教育アプローチである。ヨーロッパでは 1990 年代から広く用いられており、教育上意義あるものであることが認められている (Coyle, Hood & Marsh, 2010；Mehistro, Marsh & Frigols, 2009)。日本においても近年、特に他教科との連携を重視した小学校外国語活動や global high school の指定を受けた高等学校などで実践される機会が増えている。

CLIL の認知度が高まるとともに、CLIL に関するさまざまな概論書や実践書が出版され始めているが、第二言語習得理論の観点から CLIL の効果について論じた研究はほとんど著されていない。CLIL が第二言語習得にどのような効果を与えるのか、そしてそれはなぜなのかを教室第二言語習得研究の理論に基づいて調査することが求められている。特に、文法指導の原則としてその重要性が認められているフォーカス・オン・フォーム(focus on form; Doughty & Williams, 1998)の観点から CLIL による言語発達を検証することは、この 2 つのアプローチを深化させる上で重要な意味を持つと考えられる。

本研究では CLIL が学習者の第二言語学習動機に与える影響についても調査を行う。CLIL によって学習者は現実の言語使用の場に身を置くことになるわけで、この経験は第二言語学習者の理想的第二言語自我(ideal L2 self ; Dörnyei, 2010)の形成に直接的な影響を与えると予測することができる。このような CLIL が学習動機に与える心理的影響も現状ではまだほとんど調査されていない。

２．研究の目的

上記の背景をもとに、本研究では、CLIL の効果を英語学習者の第二言語発達と内発的動機の変化という２つの観点から調査することをねらいとした。

フォーカス・オン・フォームとして実施された CLIL 活動が日本英語学習者の文法・語彙習得を促すのか、外国語環境における CLIL 活動が学習者の英語学習に対する内発的動機、特に理想的第二言語自我の形成を促すのか、この 2 つの問いに答えることが、本研究の目的である。

３．研究の方法

外国語教育環境における CLIL の効果を検証するため、本研究では CLIL の中核的特徴を持った３つのプロジェクトを行い、４つの実験を行なった。

（１）Voices from Fukushima2013 プロジェクト

2013年5月から10月にかけて Voices from Fukushima2013 プロジェクトと称する CLIL 活動を実施した。これは、2011 年 3 月の東京電力福島第一原子力発電所事故の影響を受けている福島の人々の思いを content とし、その思いを日本人大学生が英語に翻訳して海外に届ける活動を協同的に行うことによって、原発事故とその影響について考えることをめざした活動である。

① 英語学習動機への効果

この活動に参加した大学生の英語学習動機が活動後に高まったどうかを質問紙調査法によって量的に調査した。翻訳（第 1 次訳）作業に参加した 133 名の大学 2 年生の内、第 1 回英語学習動機アンケート調査において動機総合得点が中央値より低い 48 名の学生を調査対象とした。

この実験の研究課題(RQ)は以下の通りである：

RQ 1: 原発事故に関するメッセージを英語に翻訳し、海外に伝えることをねらいとした CLIL 活動に参加した日本人英語学習者の英語学習動機(国際的な姿勢、英語学習の必要性の認識、有能性、関係性)の強さに活動前と後で違いが見られるか。

表 1 は分析結果を示す。

表１　英語学習動機調査記述統計および有意差検定、効果量の結果

要因(最高点) n=48	第1回目調査平均(SD)	第2回目調査平均(SD)	有意差検定	効果量(d)
国際的職業・活動に対する姿勢(25)	14.23 (4.55)	15.06 (4.39)	t=2.09 p=.042*	.19
英語学習の必要性の認識(25)	16.73 (3.75)	17.83 (3.18)	t=2.42 p=.019*	.32
内発的動機（有能性）(25)	14.50 (2.27)	15.33 (2.58)	t=2.07 p=.044*	.34
内発的動機（関係性）(25)	17.10 (3.36)	19.00 (3.70)	t=3.84 p=.00**	.54

*p<.05, **p<.01　効果量(d)　0.20 = small, 0.50 =medium, 0.80 = large

上記の結果から、研究課題１への答えは yes であり、活動後に参加者の英語学習動機が高まったことが明らかになった。

② 文法・語彙習得への効果

CLIL としての Voices from Fukushima 2013 Project が日本英語学習者の文法習得・語彙習得に与える効果を検証するため、独自の語彙・文法テストを用いて事前・事後テストを実施した。

本調査への参加者は大学 3, 4 年生 20 名（データ分析は 16 名）である。2 年生が作成した *Voices from Fukushima 2013* 冊子の下訳を参考にしながら、翻訳原稿の最終版を協同的に作成し、海外の人々に届けることが活動のねらいであった。

研究課題は以下の通り：

RQ 2: 原発事故に関するメッセージを英語に翻訳し、海外に伝えることをねらいとした CLIL 活動(Voices from Fukushima 2013 Projec)は日本人英語学習者の語彙力・文法力を向上させるか。

表２および表３は、有意差検定および効果量測定の結果を示す。

表 2　語彙テスト記述統計および有意差検定、効果量測定結果

n=16	語彙テスト（最高 30 点）		有意差検定 (Wilcoxon sign rank order)	効果量(r)
	事前テスト	事後テスト		
平均	7.88	22.25	z= 3.52, p = .000	r =0.62
ＳＤ	6.85	6.45		
最大	27	30		
最小	0	13		

効果量(r)　0.10 = small,　0.30=medium, 0.50 = large

表 3　文法テスト記述統計および有意差検定、効果量測定結果

n=16	文法テスト(最高 15 点)		有意差検定 (Wilcoxon sign rank order)	効果量(r)
	事前テスト	事後テスト		
平均	4.25	13.00	z = 3.44, p = .001	r =0.61
ＳＤ	3.59	2.88		
最大	12	15		
最小	0	4		

語彙、文法ともに本 CLIL 活動を通して、活動前には使えなかった語彙・文法が活動後にはより多く使えるようになったことがわかる。効果量はどちらも大きいものであり、事後テストの実施は活動の 2 か月後であったことから、少なくとも 2 か月間はその効果が持続していたと考えることができる。

（２）異文化間交流を目的とした日本紹介 CLIL 活動

異文化間交流を目的とした日本紹介の英語プレゼンテーション・ビデオを日本人大学生（19 名）が協同的に作成することをねらいとした CLIL 活動を行い、その前後で英語学習動機、理想的 L2 自我および英語力(語彙力)がどう変化するか調査した。

本 CLIL 活動の言語発達への効果を調べるため、活動の中で使用する可能性が高い語彙の習得度を測定する語彙テストを実施した。

英語学習動機（英語学習の理由）および理想的第二言語自我は質問紙法によって測定した。

表 4 は語彙能力を測る事前テスト・事後テストの結果である。

表 4　語彙テスト記述統計および有意差検定、効果量測定結果

n=19	語彙テスト（最高 60 点）		有意差検定 (Wilcoxon sign rank order)	効果量(r)
	事前テスト	事後テスト		
平均	11.32	21.79	z= 3.83, p = .000	r =0.62
SD	7.60	10.40		
最大	27	47		
最小	1	6		

語彙テストの得点平均は、事後テストにおいて事前テストの約 2 倍になっており、統計的な有意差も確認できる(z=3.83, p =.000)。効果量も大きなものであることがわかった。

表 5 は英語学習動機の一部として測定された理想的第二言語自我得点の事前テスト・事後テスト結果である。

表 5　理想的第二言語自我得点の記述統計および有意差検定、効果量測定結果

n=19	理想的第二言語自我（最高 12 点）		有意差検定 (Wilcoxon sign rank order)	効果量(r) r =0.51
	事前テスト	事後テスト		
平均	6.79	8.68	z= 3.14, p = .002	
SD	2.23	1.60		
最大	12	12		
最小	3	6		

理想的第二言語自我の得点平均は、事前テストよりも事後テストにおいて高くなっており、統計的な有意差が確認できる(z=3.14, p =.002)。効果量も大きなものとなっている。

本 CLIL 活動が参加者の理想的第二言語自我を高めたと考えることができる。

表 6 は英語学習動機の一部として測定された「英語学習の理由」得点の事前テスト・事後テスト結果である。

表 6　英語学習動機(英語学習の理由)得点の記述統計および有意差検定、効果量測定結果

n=19	英語学習の理由(最高 12 点)		有意差検定 (Wilcoxon sign rank order)	効果量(r)
	事前テスト	事後テスト		
平均	9.26	9.89	z= 1.91, p = .056	r =0.31
SD	2.00	1.70		
最大	12	12		
最小	6	7		

「英語学習の理由」の得点平均は、事前テストよりも事後テストにおいて若干高くなっており、統計的な有意傾向が認められるが(z=1.91, p =.056)、効果量は中程度にとどまっている。このように「英語学習の理由」得点に関しては、理想的第二言語自我得点ほど CLIL 活動の効果が認められない。これは、参加者が英文学科の学生であり、最初から明確に英語学習の理由を明確につかんでいた学生が多かったためと思われる。

表 7 は、TOEIC 得点と理想的第二言語自我および英語学習動機の事後テスト得点の間の相関係数を示す。

表 7　TOEIC 得点と理想的第二言語自我および英語学習動機得点の相関係数

	L2 自我	学習理由	TOEIC-S	TOEIC-W
L2 自我	1			
学習理由	.54*	1		
TOEIC-S	.82**	.53*	1	
TOEIC-W	.57*	.55*	.56*	1

**p<.01, *p<.05

表９に示した相関係数を見ると、理想的第二言語自我は英語力そのものと大きく関わっていることがわかる。理想的第二言語自我の形成を意識した言語教育の重要性を示唆する結果だと言えよう。

本調査の結果から明らかになったことは、異文化間交流を目的として、大学生が日本が抱える問題について協同的に調べ学習をし、その結果を英語プレゼンテーションにまとめ、それを録画するという一連の CLIL 活動は、語彙力および英語学習動機、特に理想的第二言語自我を高める上で効果的であったということである。

（３）スカイプを用いた日韓交流プロジェクトの概要

前節の異文化交流をねらいとしたCLIL活動の調査結果を踏まえ、2015年1月に日本人大学生と韓国人大学生がスカイプを通して英語で実際に異文化間交流を行う機会を作り、そのCLIL活動が日本人英語学習者の英語学習動機にどのような影響を与えたか調査した。

本CLIL活動のねらいは、日本人大学生と韓国人大学生との英語による交流を通し、お互いが日韓関係についての知識を深め、異文化間交流への積極的姿勢を育て、英語運用能力を高めることである。日本について日本人学生が5～6人1グループで協同的に調べ学習を行い、それに基づいて英語でのプレゼンテーションを行い、スカイプを通して韓国の大学生に視聴してもらった。国際補助言語としての英語による異文化間交流を参加者全員が実際に体験する活動が行われた。

本活動では日本人大学生22名が4つのグループに分かれ、4つのテーマ（College Life in Japan、Pop cultures in Japan、Attitudes toward Korea and Korean People、Aftermaths of the Great East Japan Earthquake and the Nuclear Accident）についての英語プレゼンテーションを準備した。

韓国の学生は、成均館大学の学生で同大学英文学科 Lee Haemoon 教授の授業を履修している学生の中で、本交流プロジェクトに参加を希望した学生である。各セッションに１～４人の韓国人大学生が参加した

それぞれのセッションは 90 分程度で、日本人学生が 1 つのトピックについて 15 分程度プレゼンテーションを行い、その後、韓国人学生から質問、感想を受け、応答を行った。

活動後、日本人参加者は交流全体を振り返る事後レポートを書いた。トピックは①自分の英語力、②英語学習動機の変化、③国際補助言語としての英語の役割、④その他であり、分量は自由とした。

本活動の効果はこの振り返りレポートをデータとして分析した。参加者の記述を KH Coder(樋口 2014）にかけ、共起ネットワーク分析を行った。分析結果からわかったことは、自分の英語力に対して否定的な表現（下手、できない、難しいなど）がほとんど見られないことである。準備不足への言及は見られるが、自分の英語力そのものを否定する記述は表れていない。英文学科の学生であり、一定の英語力を備えている参加者ではあるが、必ずしも全員が「楽に」英語で交流できる運用能力を持っているわけではなく、交流中英語がうまく使えなくて苦労した場面はかなり頻繁にあった。それにもかかわらず、振り返りレポートでは英語力に関して「わかる」、「出来る」、「言える」、「足りる」などの有能性を意味する語彙が頻出したことは注目に値する。直接相手とオンラインで英語を話す異文化間交流では、英語が伝わらないことより、伝わることの感覚を参加者は強く意識したのではないかと推測することができる。

参加した日本人大学生の多くが、同世代の同じような英語学習者との交流を楽しいものとしてとらえ、より深い交流ができるように英語の能力をより伸ばしたいと体験的に感じ、英語学習への内発的動機を高めたと考えることができる。

４．研究成果

本物の活動としての日英翻訳活動および異文化間交流としての CLIL を日本の外国語としての英語環境で実践し、その効果を調査した。このような調べ学習、協同学習を基盤とした本物の学習活動を CLIL として実践す

ることは、日本人英語学習者の文法力・語彙力などの英語力そのものを伸ばすだけでなく、英語に対する内発的動機、特に理想的第二言語自我を形成することが量的および質的研究から明らかになった。

本研究の CLIL 活動で扱った内容は、原発事故および日韓交流と意味のある深刻なものであったため、参加者はこれらの活動から多くを学び、人間的に成長したと思われる。このような成長を促すことが CLIL の最大の「効果」である。今後、このような人間的成長を促す CLIL の効果についても研究が進められていくことを期待したい。

引用文献

Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and language integrated learning.* Cambridge UP.

Dörnyei, Z. (2009). The L2 motivational self system. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2self* (pp. 9-42). Multilingual Matters.

Doughty C. & Williams, J. (Eds.). (1998). *Focus on form in classroom second language acquisition*. Cambridge UP.

Mehisto, P., Marsh, D. & Jesus Frigols, M. (2009). *Uncovering CLIL*. Macmillan.

樋口耕一(2014)社会調査のための計量テキスト分析、ナカニシヤ出版

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 村野井　仁、第二言語習得研究と英語指導、JACET 中部支部紀要、査読無、12 号、2014、1-11

② 村野井　仁、誤りと文法指導―仮説検証の証としての「誤り」―、査読無、英語教育、63 巻、2014、18-20

〔学会発表〕（計 6 件）

① 村野井　仁、第二言語指導効果研究と英語指導、大学英語教育学会中部支部大会（招待講演）、2014 年 6 月 7 日、椙山女学園大学

② 村野井　仁、第二言語習得研究の成果を生かした英語指導法―CLIL 的要素を持った技能統合型活動―、川崎市教育センター平成 26 年度中高英語科教員研修、2014 年 7 月 29 日、川崎市総合教育センター

③ 村野井　仁、CLIL 的要素を持った技能統合型のコミュニケーション活動、第 52 回北海道高等学校教育研究会英部部会研究集会（招待講演）、2015 年 1 月 9 日、札幌大学

④ 村野井　仁、第二言語指導効果研究への招待、東北大学大学院国際文化研究科付属言語脳認知総合科学研究センター第 17 回言語・脳・認知コロキアム（招待講演）、2015 年 2 月 16 日、東北大学

⑤ 村野井　仁、CLIL 的要素を持った言語活動の効果、第 3 回東北英語教育研究フォーラム、2015 年 3 月 14 日、東北学院サテライトステーション

⑥ 村野井　仁、共生のための英語教育―技能統合型の英語学習と内容言語統合学習による英語運用能力の育て方―、英語授業研究学会・関東支部第 19 回春季研究大会（招待講演）、2015 年 3 月 29 日、神奈川大学

〔その他〕

ホームページ等

なし

６．研究組織

(1)研究代表者

村野井　仁　（MURANOI, Hitoshi）

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：２０２７５５９８

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし